

---

# 世界で一つのあい物語

稲垣優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界で一つのあい物語

### 【Nコード】

N1725H

### 【作者名】

稲垣優

### 【あらすじ】

時は未来。百年にも渡る戦争を、人間と機械はしていた。誰もが疑う事に疲れていた時代、そんな時代に嫌気がさしたエデン。そして彼は『彼女』に出会う……

## （前書き）

世界観は今よりずっと未来ですが、あまり気にしなくても読めると  
思います。

が、機械が自我を持っていたり、いろいろ在り得ないことが起こっ  
ているので、ご了承ください。

また、ラストでは唐突な展開があります。そういう展開が許せない  
方は、此処で引き返してください。

「してみたいことが、あったのよ。その為に、利用させてもらった。  
それだけの関係よ」

「だったら、だったらなんで………!!」

私はただの殺戮兵器だ。

そんなこと、機械に生まれた自我である私でも、理解している。

いや、理解しているのは、私の中枢機能である部分にプログラムされているソフトのお陰なのかもしれない。

時は、23××年。

人間は一度滅びかけた。

緑の極端に少ない星へと退化し、人間が住むにはあまりにも酷過ぎる星へと、地球は変化していた。

その、人間の危機を救ったのは、機械。

人工的に緑を作り出す機械を開発し、人間の絶滅は回避した。

しかし、次第に機械は誤作動を起こし始め、そして何時しか、機械に自我が生まれ始めた。

地球に存在する機械の全てに自我は生まれ、そして、機械は人間へクーデターを起こした。

人間と機械の戦争の始まりである。

その戦いは終わることなく、機械が優勢のまま、今現在で戦争は百年目に突入しようとしていた。

何十年も経てば、戦い方も変化して行く。機械は、人型の機械を生み出し、人間の社会へと潜り込ませていた。当然、人間は同じ人間同士で疑いの色を濃くしていく。

そんな……誰も信じることが出来ないような時代に生まれたエデンは、決して裕福と言えない、軍人の父に専業主婦の母を持つ家に生まれ育った、一人息子だった。

人間が人間を裏切るような時代だ。両親も、お互いを信じては居なかった。実の子であるエデンのことでさえ、彼らは信じきっていなかったのだ。

エデンは十六になった頃、家を出た。両親はエデンを探さなかった。誰も信じない家族に嫌気がさして家を出たエデンだったが、何処へ行っても、出会うのは自分の両親と同じ人種の間人ばかり。

いい加減、『信じること』を探すのにエデンが疲れ、ホームレスば

かりの公園で休んでいた時の事。

彼は、出会った。自分と同じことを言っている、女に。

その女の名前は、ナナ。

俺が十八だと言ったら、私もそのぐらいよ、と言っていた。

確かに、見た目は同じ年ぐらいに見える。それに、相手は女性なんだから詳しい年齢を訊くのはマナー違反だ。もしかしたら、俺よりも年上なのかもしれない、と思った。

両親がいないから、名前は無いの。だから、『名無し』の『し』を取って、『ナナ』って名乗ってるのよ。と、彼女は笑いながら言った。

彼女はとても綺麗に笑うのに、どうやらこの世界に悲観しているようだった。

俺と同じだ。

「この世界は馬鹿げているわ。世界的に戦争を何十年も続けて、なんになるのかしら。いっそのこと、滅んでしまった方が良くに決まってる」

「ああ。俺も同じ意見だ。……誰の事も信じられないなんて、そんな馬鹿げた話があるものか」

たった三十分で意気投合した俺とナナは、二人で暮らすようになった。

どうやら、彼女も住む場所が無いようなので、二人でなんとか一つ

の部屋を借りた。

ボロイ上に狭い部屋だったが、二人で暮らす事と家賃を考えたらこの場所しかなかった。

けど、俺たちにとっては屋根があるだけで充分だった。

ナナと暮らす日々は、幸せなものだった。

戦争の事なんて忘れられるくらい。満足な日々だった。

しかし、どれだけしつこく訊ねても、彼女は詳しい年齢を教えるはくれなかった。

何度訊いても、「忘れてしまったわ」か「貴方と同じくらいよ」だけ。

そのことに不自然さを覚えたが、女性の考える事は分からない、といつだって其処に俺の思考のゴールは辿り着いていた。

そんな日が続く、とある日。

俺は初めてナナと出会った公園へ来ていた。

其処には、もう六十近そうなお爺さんがホームレス生活をしていて、ナナと出会った時も、彼は其処にテントを張っていた。

彼は、あのナナとか言う女の子は元気かい、と俺へと話し掛けてきた。

「はい。一緒に暮らしてますよ」

「そうかい。しかし、あの女は止めた方が良い」

「どうしてですか？」

「皆言ってるよ。あの女は化け物なんだ」

「化け物？」

俺は、当然不快感を覚えた。

仮にも、俺とナナは一緒に暮らしているパートナーだ。

そのナナのことを悪く言われて気分が良くなるわけが無い。

しかし、俺はそのお爺さんの話を最後まで、詳しく聞いた。  
その話を聞いて、俺の辿り着いた答えは、たった一つだった。

誰か、嘘だと言ってくれ。

お願いだ、ナナ。

嘘でも良いから……違う、と言ってくれ。

「なあ、ナナ」

「なあに？エデン？」

「お前、つくられてから、何年目だ？」

ナナは、その瞬間固まった。

『あの女はね、俺がまだ十代の頃からあそこに居たんだ。此処に居る連中は皆分かってる。ナナは、機械なんだ。人間のふりをした、ね』

人間のふりをした機械なんて、珍しくも無い。

そうだ、その辺に機械が居たって、なんの不思議も……無い。

なあ、ナナ。

そうだよな、人間じゃねえんだもんな。

何歳、って年齢をかぞえねえよな。

「あと231日で、私がつくられてから84年目です」

にこり、とナナは笑った。

嗚呼、あの時の笑顔と一緒にだ。この部屋を見つけた時の笑顔と一緒にだ。

「機械、だったのか？」

「うん。そうだよ」

「なんで、あんな公園に居たんだよ」

「私がつくられた理由が、戦争へ参加していない人間がどうやって生きているかだったから」

「……………そっか」

ナナは、相変わらず笑顔だった。

それはきつと、プログラミングされた行為なのだろう。

機械は自我とプログラムで行動する。

人間が理性と本能で行動するのと、それは似ているのだそうだ。

「じゃあ、なんで今まで俺と暮らしてたんだ？俺とお前の関係は？！」

「……………してみたいことが、あったのよ。その為に、利用させてもらった。それだけの関係よ」

「だったら、だったらなんで……………！！なんで、そんな思わせぶりな態度とったんだよ！！」

ナナは、いつだって笑顔で俺の名前を呼んだ。

『エデン』

『エデン』

『……エデン、』

ナナ、俺は、

「……私は戦争の為に開発された機械。我が機械軍の為に行動し、そして消える事がプログラムされています。もし、貴方が私の命令の妨げになるような行動をとるなら、それは機械軍の妨げと判断し、貴方を消去させていただきます」

「ナナ、」

「私はただの殺戮兵器です。それは、フロエ型<sup>タイプ</sup>00231に生まれた自我である、『ナナ』だけでも理解している事。……所詮、私は旧型。旧型に生まれた自我もまた、旧型なのです」

今から83年と130日前に、私は誕生した。

当時は最新型であつた私は、一年ほど戦場へと赴いたが、直ぐに新しい型が作られ、次第に隅へ隅へと追いやられていった。

そして、偶然にも人型であつた私は、戦争に関係の無い人間について調べる為に、あの公園へと置き去りにされた。

私は毎月、必ず本部へとメールを送り、此処にいる人間達を観察していた。

不満など、微塵も無かつた。

だって、私はもう八十年以上も前の旧型。廃棄されなかつただけ、幸運な機械なのだ。

これが私の使命。

使命をやり遂げるのが、機械の存在意義。

……………ただ。

ただ、私には一つだけ、してみたいことがあつた。

今ではもう存在していないのかもしれない。

けれど、八十年前には存在していた、こと。

ソレをしている人間は、とても幸せそうだった。

『幸せ』という概念がどういうものなのか。私には良く分からなかつたけれど、愚かな人間どもものに、自らが『存在していて良かった』と。死ぬ間際に言わせるほどの、ものなのだ。『幸せ』とは。

手っ取り早く幸せになる方法

否

一番簡単に、尚且つ美しく幸せになる方法

でも、きつと無理ね。

私はただの対人用殺戮兵器。

人間どもだって、もう、忘れてしまっているわ。

八十年と言う、長い長い時の中で。

「エデン、ねえ、貴方は私に何を見たの？他の人間とは違う、何を見たの？」

「……………ナナ、俺は——」

「ねえ、貴方は……………何故……………？」

「俺は……………ナナに、光を見たんだ。その笑顔に……………希望に近い、何かを見たんだ」

「……………エデ、ン、」

ナナ。

お前がなんと言おうと、俺はお前に希望を見たんだ。

俺と両親の関係の。

人間と機械の関係の。

……この世界の、全ての存在の。

希望を、見たんだ。

もしかしたら、と。

もしかしたら、ナナと俺の関係がこの百年の戦いの終わりに相應しいのでは、と。

………思っただよ、ナナ。

「何時の間に……人間は忘れたんだろうな」

「……………」

「この時代じゃあ、珍しいのは俺の方なんだ。可笑しい、だろ？」

可笑しいよな、こんなの。変なんだ。

だって、今、この世界には存在していないんだ。

俺が、ナナに抱くような、感情が。

誰も彼もが忘れてる。

この、殺伐とした時代に生きるのに必死で、忘れてしまったんだ。

愛する、ことを。

「ナナ、」

「……エデン」

「この可笑しい世界で、やっと見つけた希望なんだ。希望を無くす訳には、いけないんだ。人間も、機械も、………馬鹿げてる。さつさと、終わればいいんだ。戦争なんて」

「エデン、」

「そう思うだろ？ナナ。自分の仲間を疑うような人間も。哀しいものばかり生み出す機械も。全部、………無くなれば、いいんだ」

その瞬間、ナナの目の色が変わった。

先ほどまでは、『ナナ』としての自我中心に中枢機能が動いていたのに、いきなり、機械的な音が響きだす。

何が起こったのだ、と俺は驚いてナナを見つめる。

ピー、という機械音の後。

ナナの声ではない、機械で作られた音が俺の耳に届いた。

『先程の言葉は、我らが機械軍に対する、敵対行為と見なします。よって、今から攻撃を開始します』

そして、またもピー、という機械音の後、ナナの右手は上がる。ナナの目の色は赤へと変わっている。そして、ガシャン、という鉄がぶつかり合う音がして、彼女の手は武器へと変わる。

ナナ。

まさか、こんな終わりが来るなんて思ってもみなかったけど。  
……もしかしたら、これでいいのかもしれない。

「なあ、ナナ」

『攻撃 三秒前』

「……………」

こんな馬鹿みたいな時代で、君に会えてよかった。

何度この時代を恨んだことか。

何度この世界を呪ったことか。

でも、この時代に生まれて、あの時、あの場所へ俺が行かなかったら、君に会えなかった。

だから、だから。

俺は、今、この世界に、そしてこの時代に生んでくれた両親に、感謝すらしているのだ。

ナナ。

だから君も、この世界を、時代を、恨まないで。憎まないで。

…………… 幸せだっただろう？

この世界に生まれて。この時代で俺と生きて。

幸せ、だっただろう？

「愛してたよ。君の、ことを。——ナナ」

この世界で最も美しく気高く幸福で、そして哀しい愛の終わりの物語でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1725h/>

---

世界で一つのあい物語

2010年10月11日05時09分発行